



第67回鳳凰祭が、無事に終了しました。多くの生徒の皆さんが、かけがえない経験をたくさん重ねることができたことでしょう。もしかすると鳳凰祭当日よりも、準備に取り組んだ日々こそ心に残る出来事があったかもしれません。中には楽しかったことばかりでなく、苦手なことに取り組まざるを得ない場面や、時には友人との意見の食い違いや衝突があったかもしれません。そうしたことを含めて、何かに精一杯取り組んだことが、皆さんの大切な思い出と経験の一コマになったことでしょう。この経験を生かし、次の目標と計画を立て、行動に移しましょう。

◇夏休みを前に

(1)学習への取り組みについて

遅れがちであった分野や苦手な部分の克服と集中的な取り組み、逆に得意な教科や科目のより一層のスキルアップなど、課題意識を持って学習に取り組みましょう。また、与えられる課題をただ漫然とこなすことから卒業して、それぞれの取り組みが自分にとってどのような位置付けや意味を持つか、しっかり考えながら主体的に学習することが勉強の「やる気」のもとになるはずです。

(2)健康に関する注意について

体調管理の第一は、規則正しい生活です。登校時と同じ時間に起きて、体内時計を狂わせないようにしましょう。休み明けの体調不良は、生活リズムの乱れが一因になります。また、部活動中には、常にこまめな水分・塩分の補給を心掛けてください。体調に異変が生じたときには、すぐに休憩を取るようにしてください。屋外での活動時には、落雷事故なども気をつけてください。遠くで雷鳴が聞こえた時点で、活動を見合わせるようにしてください。急な天候悪化に伴って落雷の恐れがあるときなどにはあわてて木の下に入ることはとても危険です。できるだけ速やかに安全な屋内に避難しましょう。夏休みという高揚感と気の緩みが、思わぬ事故を引き起こすことがあります。

身体健康も大切ですが、心の健康も大切です。悩み事がある場合は、誰かに打ち明けるなどの手助けを求めるようにしてください。一人で悩むより、よりよい解決策が生まれるはずです。

(3)交通事故について

現在、山梨県下の高校は、「高校生の交通事故・違反『0』3か月運動（7月1日～9月30日）」に参加中です。夏季休業中は、同じ通学路でも登校時間帯が変わることで、交通状況も異なります。いつもの通学路でも十分に注意を払い、余裕を持って登校してください。また、自転車のルール違反については、警察による取り締まりが強化されています。法規の遵守はもちろん歩行者や対向車へのマナーにも十分配慮しましょう。加えて、夏季休業中に駅などに自転車を長期間置いたままにしないようにしてください。盗難の危険が増えるだけでなく、他の利用者にとって迷惑になります。他者への配慮を常に心がけてください。

(4)問題行動について

夏休みの解放感から、つい問題行動やそれに伴うトラブルに巻き込まれることが起こりがちです。特に以下の点に注意し、健康で、安全に、有意義な夏休みを過ごしてください。何かあった場合には、すぐに担任の先生に連絡をしてください。

○午後11時以降の「深夜徘徊」については警察による指導の強化が進められています。また、暗くなってからは不審者と遭遇する危険性が増す時間にもなりますので、塾などで帰宅時間が遅くなる場合は家族の迎えをお願いするなどして対処してください。

○インターネットやスマートフォンなどによるトラブルが多く発生するのも夏休みです。twitter やブログなどのSNSの利用時には、不用意に個人情報や画像を発信したり、他者を誹謗中傷することのないよう細心の注意を払ってください。ぜひ、節度を持った利用をお願いします。

○飲酒、喫煙、無免許運転、危険ドラッグなどに、絶対手を出さないでください。

○保護者に無断で、登山・キャンプ・旅行・外泊をしないようにしてください。

(5)その他

○本校ではアルバイトは認められていません。

○この機会に、地域の行事やボランティア活動などにも積極的に参加し、地域への帰属意識や奉仕の精神を培ってください。

◇RUSSIA 2018

4年に一度のサッカーの祭典であるワールドカップが終わりました。数々の名勝負や素晴らしいプレーに寝不足になった人も多かったと思います。優勝候補の最右翼だったフランスが予想通り勝ち抜きましたが、一貫した育成システムによって躍進したアイスランドやベルギー、圧倒的多数のサポーターの声援で番狂わせを演じたロシア、逆境をバネにハングリー精神と愛国心で数々の延長戦を制したクロアチアなど各国の差は確実に縮まっている気がしました。

さて、今回のW杯ではVAR制度が物議を醸しました。これは簡単に言うと微妙なプレーに関してビデオ判定をする制度です。デニスでもボールが枠内に入ったかをビデオで判定することがありますが、これは白黒がはっきりとつきます。しかし、接触プレーの多いサッカーでは、ファウルの判定はとても難しく、どこまでを許容して、どこからを反則とするか判断に悩むところです。もしルールを厳格に守ると、ファウルばかりで、試合が全く進まなくなるでしょう。反対に、ルールを甘くしすぎるとラフプレーが多くなり、けが人が続出することになります。したがって、選手も審判も許容できるグレーゾーンを探りながらプレーしているのだと思います。また、そのプレーが故意によるものか不可抗力かの判断も難しいところです。これは何回リプレイを見てもわかりません。最終的には主審の主観による判断に委ねられます。どんなにVAR判定に不服であっても主審の判断に従うしかありません、そうしなければゲームが成り立たないからです。

人間同士のやりとりの中で成立しているこの社会にも同じような事が言えると思います。ルールが存在し、そこにはグレーゾーンがあり、心の内を主観的に判断せざるを得ない審判役がいます。

日本サッカー界初の外国人コーチであり、サッカー日本代表の基礎を作った「日本サッカーの父」と称されたデットマール・クラマーは「サッカーは人生の鏡である。そこには人生のあらゆるものが映る。」と言っています。4年に1度のサッカーの祭典を通して、みなさんはどんなことは感じましたか？熱い戦いを振り返りながら、考えてみてください。